

### 3章 皆さんはアソコが小さいので、ショーに出ないでいいです

「みんな着替えた？」

門倉。

周りには女子社員たち。

皆、先ほどまでの切羽詰った表情はない。

前を隠した男子社員たちに笑いかける。

「どうしたの、見せてよ」

「どういう感じなのかな？」

「おチ○チン付いてんでしょ、見せなさいよ」

「それだと中身見せろって聞こえるよ！」

「布だけ、布だけ」

仕方なく、という感じで、大物三人が手を離す。

「あらご立派」

「ちょっと、何で隠してたのよ」

「おパンツ破れそうじゃない」

恥ずかしい、といいながら、心成しか腰を突き出す三人。

舌打ちしたい平田。

——課長、こいつらのキ○タマ蹴ってください。

これから、彼らがミスして蹴られていても同情できないかもしれないと思う租チンだった。

「みんな、済まない」

急に言う門倉。

そして、男子たちに頭を下げる。

「恥ずかしいだろうが、一つ頼む」

真剣に、皆を見回す。

「課長……」

——こういうまともな面もあるのか。

「出ないというものは、どうなるかわかってるな」

膝を叩く。

——やっぱりあんまり、まともじゃないか……

と、いつの間にか女子が男子の列の中に入り込んでいた。

「さあ、残りの人たちも」

「ここで吹っ切らないと、舞台に立てないよ」

「心配しないで、さっきモデルの人たちとのやり取り聞こえたから」

「大半のおチ○チンはパツとしないんでしょ？」

前から手が伸びてくる。

押さえる平田。

「ま、まってくれ。ま、おふっ」

反対側から手が伸びる。

女子社員は十人で、男子と同じだ。

だが、大物三人が無抵抗だったので三人余っている。

その一人が、手を伸ばしてきた。

平田の男の肉袋に。

グニュグニュと、肉と袋を指で混ぜる。

「ん、平田くん、君、男の子の部分、小さいね？」

「そ、そんな……」

「うちの息子のここと同じぐらいだもん」

その先輩は、三十ぐらいに見えた。

子供が二十歳ということは絶対はないだろう。

「おお、ぶかぶかじゃん」

「まずいわ、みんなおチ○チン小さいからショーにならない！」

——やめさせてくれや、そう思うなら。

しかし結局は出るしかない。

というか、全員ぶかぶかならその方がましただらう。

なまじ巨大なのが一人、大きいのが二人でピチピチだからほかのものがピチピチでないとばれる。

「皆さん、うちの商品どうでしょう？」

男性下着担当会社の社員。

平田と目が合う。

チラ、と下を見て頬が弛むのを見逃さない平田。

——笑えよ。

「す、すいません。設計ミスで大きすぎに。普通なら皆さんぴったりのはずなんですけど」

——本当にぶかぶか！ ためしに持って帰って彼氏に着せたときは、もうちょっと布ピッチリしてたよ。この会社、小さい人集まってるんだ！

肩が震える。

それを見て、門倉も震えつつ頭を下げる。

「いや、うちの男性社員が申しわけない」

「そんな、全部うちのせいで……」

笑いをこらえているので、あまり深く考えられない社員。

モデルを呼ぶのを失敗したのは平田であるから、そのせいと考えるしかない。

「でもこれじゃ、ちょっと見栄えが……あ、その。悪く取らないで下さいね？」

少し黙る社員。

——言葉選ぶか。そりゃそうだな。この問題はシビアだから。

「そうですね、ただちょっと、皆さんの男性器が平均よりかなり小さいので、パンツの布が余ってしまつてこれじゃうちの商品にマイナスかなつて。だから男性下着は揃わなかつたということで」

——言葉選んでこれ？

負い目がなければ殴りかかつたかもしれないとチラッとと思う平田。

しかしともかく、ショー参加は免れた。

下着に着替えた甲斐があつたというものだ。

普通に考えれば、ショーで遠くから囲んでいる女性たちが、先ほどのモデルや同僚のように**短小言葉責め**で来るとは考えにくい。

だからさほどのダメージはないのではないかと、出ないでいいと決まると考える平田。

——別に、出てもよかつたけどな。俺は布で隠されるから。

「いや、ちょっと残念かな」

租チン仲間が笑う。

「確かにな」

平田も頬を緩める。

「俺も出たかつたな」

ピチピチパンツの巨チン男。

「は？」

租チン七人の声が被さる。

——そりゃデッカイチ〇ポぶら下げてりゃ出たいだろうよ。

頭を振る。

まあともかく、これで危険は去つた。

さっさとぶかぶか下着など脱いで、普通のいとし下着に着替えるだけ。

——というか、改めて思い出すと普通の下着も俺は結構ぶかぶか……

……

考えても巨根にならないので、平田は考えるのをやめた。

「門倉さん！」

男性下着会社の社員——というのは間違いで、実際は平田たちと同じ服飾メーカーだが——が慌てて走って来る。

「すみません、やっぱり出てもらえますか？」

「いいですよ。みんな出たかつたって言ってましたから」

「あれは嘘ですっ！」

「あれは嘘じゃない。お前はそんな人間じゃないからな」

——俺の何知つてんだよ？！

周りを見る。

「わかりました、出ます」

大物があっさり手を挙げる。

「デカチ〇死ね！」

平田は、仲間の目が集まったことで口に出した事に気づいた。

多少の抗議はあったが、結局はそもそも出るという流れで全体が動いていた。

一旦断られたものの、相手の女性社員が会社に連絡したら多少問題があっても中止にするなどいわれ、ショー参加はやはり決行となった。

——ぬか喜びにも程がある……

ギロチンの前までつれてこられたところで、処刑中止を告げられる。

しかし、「やっぱり中止は中止」と告げられる。

そんなときの死刑囚のような絶望のなかに沈む平田。

ショーが始まる。

まずは女性モデル。

普段なら楽しんでみる場面だが、平田にその余裕はなかった。

続いて、巨チンたちが出て行く。

——こいつらが何も言われなきゃ、俺らも同じだろう。まあ、みんな仕事できてんだ、チ○コの品定めなんてありえねえよな。

「おおっ、アソコ大きいわよ！」

「すごい、パンツがおチ○ポとタマタマでピチピチじゃない！」

「あんな大きいおチ○チンぶら下げてモデルできるの？」

「デカイモデル集めたのね！」

——マジかよ……

歓声が上がる。

女たちの声は、明らかに彼女らの目が男たちの体の一部に集まっているのを証明していた。

ショーの会場は客席は薄暗く、真ん中に飛び出した台の上は輝いている。

人々の息や撮影機材の熱で汗が噴出す。

異様な雰囲気。

——いいんだ、俺は見えないし。だってチ○ポ小さいもんね！ だから布がスカスカで中が見えない！ ラッキー！ 群を抜いてチ○チン小さいから助かっちゃった！

やけくその思考。

次々と仲間たちが出て行く

「わっ、布余ってるわ！」

「カップぶかぶかじゃないの！ チ○チンドンだけ小さいの！？」

「ええ、どういうこと？ デカチ○モデル呼んだんじゃないの？」

「とにかく小さい人が出てきてるのは確かよ！」

「写真とって！ 前の人の立派さとのギャップ凄いわ！」

「こんなギャップつけさせるなんて、演出考えた人は悪魔ね！」

——悪魔はお前たちだ！ 大人の女なんだから、チ○チン小さいことを男が気にすることはわかってるだろ！ それを会場全体で湧き上がりやがって……

唇を噛む。

ある程度引き締まった腹の上を、ダラダラと汗が垂れる。

次は、平田が出る番。

女性モデルらがグルリと回って舞台袖に戻りつつあった。

と、踏み出そうとして、平田は気づく。

汗を吸った下着が、体に張り付いている事に。

——か、ば、馬鹿な、そんな……酷い……むちな、これは……

群を抜いて股間が控えめなために、布と当たらずに中の様子がうかがい知れない。

唯一、平田を守っていた僅かな利。

それが、汗のせいで消滅した。

「平田、何してるの！ 膝金食らう？」

「い、いやだ……俺は……」

「く……」

今膝金を食らわせ、行動不能には出来ない。

——まずいわ、面白いから短小責めしすぎた。まさかこんなタイミングで頭がクラッシュするなんて。膝金以外部下を動かす手なんてないわよ……どうすれば？！

引き出しの少なすぎる門倉は、それでも責任は放棄しない。

何か手はないかと頭を回す。

舞台のほうを見る門倉。

目を見開く。

——そうだ、いいこと思いついた！



「平田！」

「な、なんです？」

「舞台に、          が！」

「は？」

「ほら、『誰でもデカチ〇機』をもって舞台に！」

「ねーよ」

そんな夢のありすぎる道具があるわけがない。

「っていうか、意味不明すぎるんですけど？」

「でも、正気に戻ったわね？」

あ、と顔を強張らせる平田。

「それじゃ、いってきなさい！」

パンツだけの平田。

そのパンツを引っ張り、体を回転させて舞台上に突き飛ばす。

ポンポンと歌舞伎の足取りのようにして、舞台上に飛び出す。

——ひでえよ、無茶苦茶じゃん。

「きゃあ！」

歓声。

さぞ、烈火の短小責めが始まるのだろうと平田は覚悟していた。

だが、そうはならない。

「凄いわ！」

「ヤバイわね」

そんな声、ざわめきが広がる。

「なんだ？」

不思議に思いつつ、ひらめく。

先ほどの足取りが、演出と思われたか。

——変な動きしてりゃ、パンツが目立たないな。

そう思うや、また飛び出す。

「凄いわあの人！」

「あんな弛んだパンツでジャンプして！」

歓声に紛れて、そんなやり取りがなされていた。

門倉に引っ張られたパンツのゴムは伸び、汗で下着が滑り出していた。

舞台を進み、引き返す一番端の所で大きく見栄を切る。

そこで何が起きたかは、ほとんどいうまでもない。

スルリ。

音を立てて、パンツが太股を滑り、脛を越え、足首に掛かる。

まるで足かせだ。

ジャンプすると、それが両足の距離を保とうとして、バランスを崩させる。

それでも、片方の足が抜け、パンツが飛ぶ。

着地する平田。

ブルン、と、大きく開かれた脚の間で、男の肉が見得を切って震動する。

「小さい！」

「でも揺れてるわ！」

「いかに小さいとはいえ大人の男性器ですもんね。っていうか、キ○タマはわりと普通ね」

「でも、上は小指！」

意味のある声も聞こえるが、ほとんどはただの歓声だった。

——凄い声援だ。俺、歌舞伎の才能あるのかもな。

四方を向いて見得を切る。

振り返るたびに、ブルンブルンと肉が揺れる。

「課長、タマタマ揺れてるのは見えるけど、おチ○チン小さすぎて見えません！」

「ルーペをつけるしかないわね」

「それでも多分見えませんがね！」

横や後ろを向いたとき、舞台袖の女性社員全員が彼のものを目撃する事になった。

「すごい租チンじゃない！」

「ええ、男？」

「キ○タマ付いてるでしょ！」

「っていうか、男らしいね！ あんなの晒して平気な顔だよ！？」

「っていうか、気づいてないでしょ！ 気づいてたら心臓止まる状況だからね！」

「死因は短小」

「どんな名探偵にもわからないよ！」

女子の盛り上がりと反比例して、男子らは通夜のような様子だった。

状況に平田が気づいたとき、どう慰めればいいのか同じ男ながら、何も思いつかない。

いや、男だからこそ現状の悲惨さがわかるのだ。

どこに出しても最下位争いのドリルチ○ポを男らしくブルブル振って、ついに平田は舞台袖まで歩ききる。

「お疲れ！」

男子たちが回りに集まり、タオルで股間を覆う。

「平田、お疲れ」

「ああ、いい舞台だった」

「平田、どんまい」

「ああ……？」

「平田、パンツはかせてやるよ」

「ああ……って、どういう台詞だよ！？ 自分で穿くに決まってるだろ！」

いいつつ、タオルで隠された自分の下半身に手を伸ばす平田。

舞台用のパンツを脱がなければならない。

だが、それはどこにもなかった。

しばらくして、上気していた顔が一瞬で蒼白に変わる。

「あ、うそ……」

「平田、よくやった」

門倉。



「平田、よくやった」  
門倉。

男子を押し分け、肩を叩く。

「度胸が付いただろ？ 租チンを晒して」

「はあ」

「どうだ、未来が明るくなっただらう」

「はあ？」

昔の新聞ネタなのか、  
舌が回らなかっただけか。  
追及する気力は、今の平田には無かった。

男子を押し分け、肩を叩く。

「度胸が付いただろ？ 租チンを晒して」

「はあ」

「どうだ、未来が明るくなっただらう」

「はあ？」

昔の新聞ネタなのか、舌が回らなかっただけか。

追及する気力は、今の平田には無かった。

瀬戸大橋を渡っていたら急に橋が消えた時のような、足元がおぼつかなくなった気分でただ歩く。

その後、武士の情けか、もしくはただ当たり前の話か、彼の丸出し姿は取材していたメディアから、いかなる形でも公開される事はなかった。

ただ、大勢の女性に短小包茎の三重苦を見せ付けた事実は、変えようが無いのだった。

体験版終わり

今回は三章が体験版となります

続きと一、二章は製品版で

ほかの部分が気になった方はぜひ製品版を